

## 研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山大学人文学部人文学科
- ・所属ゼミ 富山大学文化人類学研究室
- ・指導教員 野澤豊一、藤本武
- ・代表学生 星野正樹
- ・参加学生 上野由愛、浦上結衣、大井萌莉、窪田歩実、小林滉、丑蘊斐、富岡雪乃、松井成弥、森由希子、渡辺聖菜

### 【滑川市の宿場回廊における景観の保存・活用に向けた基礎調査】

#### 1. 課題解決策の要約

本研究では、調査を踏まえて次の提案を行った。まず景観の保存と利用を目的に掲げるならば、その担い手である空き家への移住者を広い範囲で増やすことが重要である。そこで「宿場回廊」というパッケージを改めて作りあげることが必要であると考えた。現在は点在している「宿場回廊」の情報を一つに集約することで情報へのアクセス性を向上させ、ただの観光で訪れたという人にも移住という選択肢が視野に入るような環境をつくる。また地域の発展に伴い起こる、駐車場不足やごみ問題といったものは、空き家の利用者・移住者と地域住民とで交流を深めること、つまり「横のつながりの強化」を図り解決していくべきだと考えた。

#### 2. 調査研究の目的

旧滑川宿は北国街道加賀藩の宿場町として賑わった当時の歴史的景観を今でも色濃く残す地域であるが、現在ではその一帯は空き家の増加や住民の高齢化などに伴い、町の空洞化が進んでいる。一方で、旧滑川宿の一部でもある瀬羽町に関しては、ここ数年の間に空き家を利用し新たに店を開く人が多く現れ、活気を戻しつつある。そこで本研究では、実際に瀬羽町で空き家をリノベーションし新たに店をだした店主に加え、空き家利用のアシスト役である市や不動産屋、そして地域住民の三方面からの聞き取り調査を行うことで空き家の利活用における現状や問題点を明らかにする。そこから、今後歴史的な景観を保存・利用していくにあたり、持続可能な町づくりをするための提言を行うことを目指す。

#### 3. 調査研究の内容

##### 宿場回廊の歴史、空き家の現状、文化財保存・活用への取り組み

滑川市は、古くは16世紀初頭から北国街道加賀藩の宿場町として人の往来や物資の流通で賑わった。滑川の町で直接的に宿場の機能を果たしていたところは、「本町」と呼ばれる、草分町人が居住する、格式の高い場所だった。滑川における本町は、大町、狭町（現在の瀬羽町）、新（荒）町の3つの町であった。その中でも瀬羽町は、昭和の時代においても栄え「瀬羽町銀座」と言われるほど店や人通りが多く賑わっていた。そのためこちら一帯は宿場町としてだけでなく高度経済成長期以前の店の面影も残る場所である。



図 1 旧滑川宿一帯の地図 (国土地理院地図より作成)

また現在では、かつて宿場町だったそこら含めた一帯を回廊のように回ってみようということで、町には「なめりかわ宿場回廊」として13個の看板が立てられ、滑川市観光協会から「なめりかわ宿場回廊めぐり」(写真1)のパンフレットが発行されるなどしている。



写真 1 なめりかわ宿場回廊めぐりガイドマップ (滑川市ホームページより引用)

一方で滑川市では現在空き家が多く存在する。平成 27 年に滑川消防署で行った町内会調査の集計では、滑川市内で 748 戸の空き家があり、平成 21・22 年と比べて 199 戸 (36%) 増加している。その後、滑川市まちづくり課で平成 29 年度に滑川東・西地区の空き家を調査したところ、滑川東で 81 戸、滑川西で 45 戸の計 126 戸が増加していた。また、令和 2 年度に把握している市内全域の空き家で取壊しや居住実態がないか等を調べたところ、令和 3 年 2 月末で空き家の戸数は 632 戸となっている。宿場回廊一帯が該当する地域である、滑川東・西地区においては、409 戸 (令和 2 年) の空き家があり市内全体の 65% を占めていた。背景には、かつて港町や宿場町として栄えていた海沿いから、大型ショッピングモールや交通網が整備されたこと

により利便性が上がった内陸部へと都市機能の中心が移動し、それに伴い人も移動したことが一つの理由として考えられる。また海沿いに住む住民からは、道路の狭さや都市部へのアクセスの不便さなどから、一度就職などで外に出た若者は移動先で所帯を持ち戻ってくる人は少ないという。しかしある意味では、都市機能が移動したことで海沿いでは開発が進められず、当時の歴史的景観が残っているとも考えられる。

このように宿場回廊内にはかつての歴史的な財産が残ってはいるが、空き家の増加や住民の高齢化などの、町の空洞化が顕著になっている。そういった現状を憂う地元の有志たちで 2010 年 5 月に「滑川宿まちなみ保存と活用の会」が作られた。2013 年には NPO 法人化され、その活動の中で歴史的・伝統的都市景観を保存し、この地に伝えられた歴史文化を、地域の発展へとつなげていく活動に取り組んできた。実際に、活動の成果として、瀬羽町における旧宮崎酒造主屋、城戸家住宅(旧神田屋商店〈じんでんや〉)、菅田家住宅(旧恋塚屋)、寺家町における廣野家住宅(旧廣野医院)、荒町における小沢家住宅(旧小沢呉服店マンマ)といった建物が国登録有形文化財として保存された。またそうして保存された建物の一部では、地域の祭りや交流に加え地域関係者による講演会や文化活動(音楽会・絵画展示会など)といったことが行われている。更にその様子は SNS を通じて外に向けて発信されている。このように歴史的景観を文化財として保存するだけでなく活用し発信することで、町に再び活気を起こそうとする姿勢が見える。

### 滑川市で取り組まれる空き家仲介事業

滑川市には空き家が非常に多いと述べたが、行政も空き家に対する対策を練っている。その一例として、滑川市の空き家対策の一環として、「ミライノミカタ 滑川市空き家等での居住体験を通じた課題発見事業」というものがある。県外に居住するテレワーカーや、県外事業者等を対象に、3ヶ月間で家賃と光熱水道費は無料で滑川市が提供する空き家に住んでもらおうという企画である。令和4(2022)年7月 11 日から募集を開始し、聞き取り調査を行った令和4(2022)年7月 22 日時点で、すでに申し込みがあったという。その他にも平成 20 年度から令和 4 年度まで「まちなか再生事業」に取り組んでいた。各種商品小売業等の店舗創業者に対し、土地や建物の取得費用、改装費や賃貸料を補助金として交付するというものである。このように行政も空き地や空き家の有効活用を図り、にぎわいの創出と地域商業の振興を図るために行動していることが分かる。

空き家を売りたい人、それから利用したい人の両者が訪れ、その双方の繋ぎ役となるものとして不動産屋が挙げられる。瀬羽町には平成 27(2015)年から営業している不動産屋、「富山中央エステート合同会社」がある。同社の建物自体も、もともとは空き家だったところを改修して、事務所として利用している。エステートで働く堀田裕司さん(60 歳)曰く、「空き家を売りたい人は、基本的には空き家を手直しせずに売ることが多い」という。その背景には、地価の安い滑川では、解体工事の費用の方が土地を売って得られる金額より高いことが関係している。一方で「買い手側の傾向としては、近年は、空き家を住まいや店として利用したいという若者が多い」という。実際の例として瀬羽町にも、空き家をリノベーションして営業している店が多数存在している。しかし、瀬羽町の場合は空き家があることを宣伝したことがなく、自主的に空き家の買い手や空き家を使用したい人が集まったようだ。そのためか、瀬羽町で空き家を利用する人に話を伺うと、なにか積極性やこだわりといったものを持ってこの地で店を開いていることが見えた。次の話題ではそうした瀬羽町での空き家の利用者の語りについて触れていく。

### 空き家をリノベーションし店を開いた人々ー瀬羽町の事例より

現在瀬羽町には飲食店、雑貨屋、古道具屋、古本屋、花屋、パン屋といった 11 の商店が並んでいる。その中の飲食店のひとつ、「ハンモックカフェ・アマカ」は、季節の果物を用いたパフェなどを提供するカフェで、インスタグラムのフォロワーが 1.2 万人を超える(2022/12/20 時点)人気店である。こうした SNS を活用した店も多いためか、現在では瀬羽町に情報をキャッチした若者が多く来訪する。

そのようなユニークな店が多くある中で、国登録文化財指定された建物、城戸家住宅主屋を利用した雑貨屋はとりわけ注目に値する。鍋谷智子さんが平成 27(2015)年5月3日にオープンした「じんでんや」(写真2)

である。現在では、鍋谷さんは、じんでんやの営業を別の人に任せて、瀬羽町に令和元(2019)年5月3日に新たに空き家として当時の看板を残すなどレトロな雰囲気が特徴の「玄米&海洋深層水デトックスカフェハレとケ」(写真3)をオープンし、そちらの営業に専念している。鍋谷さんは、かつて宿場だったこともあり有形文化財が多く存在するにもかかわらず、人通りが少なくなっている瀬羽町ににぎわいを作り出したいという思いから、この地で店を始めた。またハレとケでは、昭和の日には昭和まつりと称して昭和の歌謡曲を聞きながらのランチや、じんでんやで作品を販売する作家さんらによるファッションショーを行うなど、その他にも数多くのイベントを開催している。



写真2 (左) 「じんでんや」外観



写真3 (右) 「玄米&海洋深層水デトックスカフェハレとケ」外観

令和元(2019)年に開業した、美濃焼とアクセサリーの店「朱雀堂」の店主、柿澤沙帆さんは「今はハンモックカフェ・アマカがあるから、この通りがにぎわっているが、それ以外にも人が集まるところをつくりたい。何もなくて何もないところの良さがある。このまちで店を出したからには、このまちに人を呼ぶことは義務だと思っている」と語る。また、柿澤さんは、自身で「瀬羽町偏愛 MAP」(図 2)というものを作成している。このマップには、現在の瀬羽町にある全ての店が紹介されている。各店舗についてのコメント付きで、柿澤さんの瀬羽町への思いが詰まったマップになっている。



図2 瀬羽町偏愛 MAP の一部分

その他にも令和4(2022)年7月に瀬羽町にオープンした低糖質パンを提供するパン屋「hope」の店主、竹島明奈さんは、旧宮崎酒造の2階で一日喫茶をやる機会があり、もともと古いものが好きでこの町の感じが好きなことも相まって、瀬羽町で店を開こうと決意したそうだ。また瀬羽町のいいところについて伺ってみると「それぞれの店が自由に個性的にやっているところ」と話していた。

以上のように、この瀬羽町のもつ歴史的景観やその雰囲気を感じ取り空き家をリノベーションして店を出す人やこの町ににぎわいを作り出したい人を呼び込みたいという人など活力的な人たちが集い作られたのが現在の瀬羽町だといえる。またその特徴として滑川市外の人たちにも、SNSを活用することで自身らの個性的で魅力あふれる店の情報を発信し多くの若者を瀬羽町に呼び込んでいる。空き家をリノベーションすることで歴史的景観を保存しながらも店として活用することで町に活気を取り戻している、瀬羽町はその成功例だと言えるだろう。しかしそのような瀬羽町にも課題があることが地域住民の語りの中で見えてきた。

#### 地域住民から見る空き家の利活用にまつわる問題点

昭和40(1965)年から瀬羽町に移り住み床屋を営んでおられた78歳の菅田榮子さんは、過去と現在の瀬羽町を知る住民の一人だ。かつての瀬羽町には「ないのは葬儀屋くらい」と言われるほど、たくさんのお店が並んでいたという。また、店が閉まった後でも、店と同じ場所に店主が住んでいたため、住民の数も多かったそうだ。しかし現在の瀬羽町はというと旧宮崎酒造が文化財に登録されたり、カフェなどの店ができたりしたことで、人通りが戻りつつあるが、昔ほどではない。また、かつてとは違って、現在瀬羽町で営業中のお店の店主たちは瀬羽町の住民ではないため、店が閉まると別の場所にある自宅に帰ってしまう。そのため、夜になると誰もいなくなってしまう、寂しいと話した。ここから見えたのは、現在の瀬羽町における空き家利用が「移住」ではなくあくまで「一時的な経営」をしているだけに過ぎないという点である。この事実をふまえると、今後数十年単位で見たときに町の存続は不確かと言える。

瀬羽町から旧街道沿いに500mほど北東に進んだところにある中町に、「Cafe ふう」という喫茶店がある。店主の角川淳子さん(70歳)によると「瀬羽町には新しい店ができてにぎわっているが、同年代の人たちが遊びに行けるようなところがない。同年代の人が集まれるような場所をつくりたい」という気持ちで、5年前に空き家を紹介してもらい店を始めたという。角川さんに、中町も瀬羽町のようににぎわってほしいかと尋ねたところ、「瀬羽町みたいになってほしいとは思わない」という答えが返ってきた。菅田さんの話にもあったように、現在の瀬羽町には、かつてのように住み込みで店を営んでいる人はおらず、店主は日中に店を営業しにくるだけになっている。そういった店が中町にできることを特に望むわけではないという。角川さんにとって喫茶店の経営は地元の常連たちの居場所を残すためのものであるといい、同じ理由で地域の情報誌からの取材を断っている。「自分たちで、自分の居場所をつくる」という趣旨である。翻って、瀬羽町には個性的な魅力を持って外部から新しい人をたくさん呼び込んでいる店は多くできつつあるが、地域住民の憩いの場になるような場所がまだ多くできあがっていないということである。

調査のなかではもうひとつ、瀬羽町における「駐車場不足」という課題も見えてきた。現在、瀬羽町には、町を散策する際に利用できる、共有駐車場がある。また一部の店は、2、3台の駐車可能なスペースを所有している。前述したエステートが、瀬羽町の土地を買い取り、駐車場として提供しているところもある。しかし、土日祝日や大型連休には、駐車場が足りなくなってしまう。瀬羽町は道路幅がとても狭いため、路上駐車などで道を塞いでしまうと、近隣住民の迷惑になる。実際、瀬羽町に隣接する浜町に住む女性は、現在の瀬羽町へ多くの人があることについて「コロナ前は浜町への路上駐車も多かった。また公園でのごみのポイ捨てなどもあった」と語る。これに対して「守ることは守って滑川が発展してくれればよいと思う」とその心情を語った。

#### 4. 調査研究の成果

以上から明らかになったように、旧滑川宿では町の空洞化が進んでいるものの、その歴史的景観や雰囲気に価値を見出す活力的な地元の団体や外部からの空き家利用者によって保存・活用・発信され、現在

では瀬羽町を中心として来訪者が増えている。しかし、現在の瀬羽町における空き家利用が「移住」ではなくあくまで「一時的な経営」をしているだけに過ぎない点を鑑みると、今後数十年単位で見たときに町の存続は不確かである。また地域住民の憩いの場になるような店もまだそう多くはできあがっていない。さらに実際的な問題として駐車場不足やごみのポイ捨てという問題も挙がった。

## 5. 調査研究に基づく提言

以上が本研究の成果だが、最後にそれらを踏まえて、今後滑川の旧宿場町周辺の景観が保存・活用されるための提案を行う。まずは、歴史的景観が長い将来保存されていくために、瀬羽町だけではなく他の町への移住者を増やし、それを活用していくための持続可能な町づくりを目指すべきである。

本調査では瀬羽町を中心的な話題として取り上げた訳だが、その周辺の町は未だに空き家が多い現状にある。そこで、現在は点在している、①不動産屋の空き家情報や市の空き家移住促進事業の実態、②歴史的景観を文化財として保護しイベントなどで活用している団体の活動、③この地に訪れる足掛かりにもなる瀬羽町の個性的な店々の各種 SNS や店主から見たこの町の魅力など、これまで本研究で記述してきたような情報同士をリンクさせることが有効と考えられる。たとえば、「宿場回廊」という一つのパッケージ化されたサイトを作りあげ、そこに情報を集約するのである。こうすることで情報へのアクセスのしやすさが向上し、移住希望者や空き家を利用したい人だけでなく、これまでは瀬羽町にただの観光で訪れていた人にも、「魅力あるこの地への移住」という選択が視野に入るようになり、移住者の数が増えると考えた。

また、駐車場問題やごみ問題といった地元住民に対する問題も存在する。これに関しては「横のつながりの強化」が最適だと考える。これは移住、もしくは空き家を利用する者と地域住民との協力関係の構築のことである。「Cafe ふう」のような地域住民が集う場所があることを活かし、その場を使って地域住民向けの交流会などを行うことで店と地域住民とのつながりが強まり、お互いにこうした問題に対して向き合い、協力して課題解決に向けた取り組みが行えるのではないかと考えた。

## 6. 課題解決策の自己評価

今回の調査では主に瀬羽町が中心で、周辺の町について深く聞き取りを行えなかった。一方で現地住民だけでなく、不動産屋や NPO 法人、市などに聞き取りを行って多角的な視点を得て、着想に至った今回の提言は、今後の滑川「宿場回廊」の行く末を考える際の大きなビジョンを描くための助けになりうるものとも考える。